



## 淀川流域を中心とした 流域連携の取り組み

石田 裕子

摂南大学 理工学部 都市環境工学科 教授

河川敷での工作体験の様子



淀川でのEボート体験の様子

### ■ 淀川左岸域での水辺再生活動

筆者の勤務する摂南大学は、淀川中流左岸の大阪府寝屋川市に位置しています。市内中心部には、市名にもなっている一級河川・寝屋川が流れており、今では市のシンボルになっていますが、かつては大東水害(1972年)をはじめとする洪水被害や水質汚染の結果、コンクリート護岸と高いフェンスに覆われ、人々に見向きもされない川になってしまっていました。その結果、川がゴミ捨て場ようになっていました。

この寝屋川を何とかしたいという市民の思いが集まり、2001年に寝屋川市制50周年を機に、行政と市民の協働組織である寝屋川再生ワークショップが市民公募により結成され、市民によるまちづくり計画「寝屋川再生プラン」が策定されました。この中で、一級河川・寝屋川に3つの親水公園(寝屋川せせらぎ公園、幸町公園、川勝水辺ひろば)と公園、水路、ため池でそれぞれ1か所の整備が行われました。ワークショップでは、水辺整備の他にも、年2回のクリーンリバー作戦(一級河川・寝屋川での河川清掃活動)、市内水路でのEボート乗船体験や生物観察会など、市民に水辺に関心を持ってもらうための活動も行ってきました。こ



寝屋川せせらぎ公園

れらの活動は、いい川・いい川づくりワークショップで表彰されるなど、全国的にも知られるようになりました。しかし、約20年続いた活動も、2020年から始まった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により、寝屋川再生ワークショップの活動が休止となり、今も再開できていません。クリーンリバー作戦だけは2023年から規模を縮小し再開できましたが、今後元の活動規模に戻ることを期待しています。



浸水歩行訓練の様子



淀川河川敷での外来植物駆除作業

寝屋川本川での活動は少なくなった一方、2006年からは、ワークショップのメンバーが中心となってできた市民団体「ねや川水辺クラブ」が淀川管内河川レンジャーや大学生と協働して淀川・点野地区の砂州で外来植物の駆除を行うことで、市民が気軽に近づく水辺空間を目指した活動が始まりました。毎月一回定例の点野拠点整備活動の他、淀川まるごと体験会の実施などが行われています。こ

れらの継続的な活動が認められ、淀川河川公園の再整備のモデル地区として選定され、2016年に「点野水辺づくりプロジェクト」が始まりました。市民ワークショップで出た意見を踏まえて、新設ワンドと、高水敷を切り下げてワンドへ近づきやすい斜面が整備されました(工事の完了は2024年3月)。現在は地元企業も連携団体として加わり、点野地区での活動が行われています。



天若湖(日吉ダム)での設営作業状況



天若湖アートプロジェクト写真(右手前:世木林・左奥:沢田)

## ■ 淀川と桂川の上下流連携

1998年に桂川上流に日吉ダムが建設されました。このダム建設によって、201世帯216戸が移転し、新しくできたダム湖は集落の名前から、天若湖と名付けられました。日吉ダムは桂川下流域の治水や利水のためにつくられたダムですが、建設当初から「地域に開かれたダム」というコンセプトでつくられ、温泉等の周辺施設が整備され多くの来訪者に利用されています。2004年には湖面利用のルールが定められ、新しく生まれた公共空間である「ダム湖面」の幅広い市民による利活用が求められることになりました。

同2004年にNPO法人桂川流域ネットワークが「市民による天若湖の新しい湖面利用提案」を募集し、応募された中に、ダム湖に沈んだ集落の一戸一戸の上にあかりを浮かべるといったインスタレーションの提案がありました。これをNPO法人アート・プランまぜまぜが企画化し、2005年に天若湖アートプロジェクト「あかりがつなぐ記憶」とし

て実現しました。当初は、宮村と世木林の2集落のみの再現でしたが、年数を重ねる間に地点数を増やし、2009年には沢田、楽河、上世木を加え、ダム湖に沈んだ全5集落の再現が可能となりました。その後もおおむね全5集落の再現を実施していますが、これもコロナ禍の影響で一時期中止となり、再開後は2~3集落の再現となっています。この取り組みは流域内の市民団体や大学、水没集落移転者などで実施しており、メインプログラムのあかりの設営は、(独)水資源機構桂川・猪名川ダム総合管理所の全面的な協力を受け、ダム職員の操縦するボートに乗り、現在は摂南大学の学生たちが実施しています。

天若湖アートプロジェクトは新たな上下流連携のあり方として、アートという手法を用いています。地域の思いやダムに対する考え方は多様です。アートという形をとることによって、立場や意見の異なる多様な人々が地域の問題を共有し、上下流間で共感することができます。こうすること

で、地域、流域の人々をつなげ、地域の記憶を次世代へつないでいくことを目指しています。2025年に20回を迎えた「あかりがつなぐ記憶」は、これまでに水没移転者や地元住民の他、下流域の流域住民にも見ていただけるプログラムとなりました。

天若湖アートプロジェクトはメインプログラムの他に、地元地域やアーティストと連携して、地域の街歩きマップの作成や、古民家での襖絵プロジェクト、水没移転者のドキュメンタリー制作やお話し会など、地域と下流域の流域

## ■ これからの流域連携について

近年、気候変動による洪水災害の激甚化が深刻になっており、国土交通省により各地で流域治水プロジェクトが進められています。流域治水においては、あらゆる関係者で水災害対策を推進することが求められています。「あらゆる関係者」の中には流域住民も含まれます。治水対策を河川管理者だけに任せるのではなく、流域住民も自分事と

住民をつなぐ活動を行ってきました。最近では、日吉ダムで開催された“よし笛コンサートとトークセッション”(2024年10月14日)において、地元地域の「ひよし龍の森プロジェクト」や木津川のアーティストと上下流・流域間連携を行いました。また、“気象キャスター講演会in日吉ダム”(2025年11月16日)においても、天若湖アートプロジェクトの意義について参加者に向けて積極的に発信しています。

して捉える必要があります。そのためには、日頃から川に親しみ、その川の課題が何であるかを知っておくことが大切です。日常的に川に親しみ、地域内あるいは上下流や流域間の人的交流を深めることで、地域力の向上やいざという時の備えになると思っています。